

I W W の前文

労働階級と雇主階級とは何一つ共同すべきものを持ってはいない。数百万の労働者の中に飢餓と貧困が存在し、少数の雇主階級が良い生活をいとなく限り、いかなる平和もあり得ない。

こうした二つの階級の間には、世界の労働者がひとつの階級として組織され、土地と生産手段を握り、賃金制を廃するまでは、闘争が継続する。

われわれは、ますます小數化する者たちの手中に産業経営が集中することは、労働組合が、常に増大する雇主階級の権力に、対抗できなくなることでたと知っている。

労働組合は、同一産業の中の一団の労働者たちを、他の一団の労働者たちに対して敵対させ、このために賃金闘争において、いずれも敗北するに至るような事態をはらむものである。さらにまた、労働組合は、労働者たちの判断を誤まらせて、労働階級とその雇主とは共通の利害を持つものだと信じさせて、雇主階級を助けるものである。

こうした事態は、あるひとつの産業の中の、または、もし必要だったら、すべての産業の中の全員が、そうし

た産業のある一部門にストライキあるいはロックアウトが始まったら、いつでも仕事を中止し、こうすることによって一部に対する打撃を全部に対する打撃とする、といった方法でつくられた、ひとつの組織によってのみ変革することができし、労働階級の利益は、こうしたひとつの組織によってのみ維持できる。

『適正な仕事に適正な賃金』といった昔ながらのモットーに代えて、われわれはわれわれの戦旗に『賃金制度の廃止』という革命的標語を書き込まねばならない。

資本主義を廃止すること、これが労働階級の歴史的使命である。資本主義に対する日常闘争のためばかりでなく、資本主義が打倒された時にも生産を実施するためにもまた、生産の軍団が組織されねばならない。産業的に組織することによって、われわれは古い殻の中に新しい社会の構造を形成しているのである。(三浦訳)

書評

橘隆志訳『バリ・コミューン』について

橘君がクロボトキンのパンフレット、バリ・コミューンを出した。英語からの訳である。もともとこれはレヴェル紙に書かれたものであり、エリゼ・ルクリュはクロボトキンの入獄中に、他の諸論文とともに「叛逆者の言葉」に編集して出版した。僕が訳したのはフランス語からである。

この叛逆者の言葉の中には大杉が英文から訳した「青年に訴う」や石川訳の「法律と強権」などがある。青年に訴うは、この本では単に「若い人々へ」となっており内容も英文のものよりも長い。これを英訳したのは多方向クロボトキン自身であろうと思われる。というのはイギリスの実状に合わせて取捨したようだからである。たとえばフランス文でメキシコ・パンタロンになっている所が英文(ヴァンガード版)では「仕立ての良いズボン」となっていたりする。

バリ・コミューンの英訳は僕の手もとにないし、クロボトキン自身の訳かどうかも分らない。クロボトキン自身が訳したと思われる「国家論」などには誤訳ではないかと思われるような所もある。日本語とヨーロッパ語と

いったものところが親近性の強い英語とフランス語でも、国家という障壁によって風習も言語も相違があり、正確に訳することはなかなか容易なことではない。ましてそれを全然語脈のちがう日本語に訳するとなれば至難と言わねばならない。

橘君の訳を読んで、実に良くやったと言いたい。若い橘君の英語の実力を買いたい。随分苦労しただろうと思う。今後とも一層の努力を望む。

橘君の参考までに最初の一節についてフランス語版から見た差異について書くことにしよう。

英語版では第一節として「社会主義の発展に於けるコミューンの位置」という小題がついているが、フランス語版にはない。ただI、IIという区切りがしてあるだけである。

3ページの終の方の「その将来の方向が段々と分り始めて来たのは、彼等がそれに適合し始めた直後であった。それが次第に明確かつ的確になり、その全き明白性、全ゆる素晴らしさ、正義及びその諸結果の重要性を理解するに至った——その時、新原理が考え出された——のはその直後においてのみだった」は、フランス版では——でくくった所がなく、「その将来の重要性を予想しはじめたのは、やっとそれを実地に応用するときになってであ

り、この新しい原理がますます精確さを加え、あらゆる明確さ、あらゆる美しさ、その結果の正しさと重要性をもって、決定的なものになって出現したのは、その後に行なわれた思想活動の結果に過ぎなかった」となっている。英語とフランス語版にはこうした差がある。

4 ページの矢張り終りの方で、「政治的組織」「組織」と訳されている語は、英訳ではどんな言葉が用いられているのだろうか。フランス語ではグループマン ポリティク デンシエテで私が「社会の集団様式」と訳し、また「集団」と訳している言葉である。グループマンは集団とか結集で、必ずしも組織ではない。5 ページに「生産と交換を組織し」とあるのは、明らかにオルガニゼである。

8 ページの「おしゃべり共の一同が、フランスの防衛か、国内運動の発展かのどちらかを如何に組織するかという理念を有していない権力の占拠したことを悟り・・・」は少し分りにくく訳してある。英語にイーザー オアが使っているのだろうと想像するが、フランス文では「権力を独占していたおしゃべり屋共の一同が何一つ組織することも、フランスを防衛することも、内部的な進展もできなかったということを見てとっていた」になっている。

野 火

萩原道子さんの永眠

萩原晋太郎君の御母堂で、二月二十六日脳溢血で倒れそのまま世を去られた。私が千葉県に引込まねばならなくなつて、リベルテールの発行所を萩原君宅に置いて以来、発送の時は萩原君がお嬢さんと二人でリベルテールを持ち帰り、発送にも応援の者が少なかつたりして、家族総動員での御手伝いを受けたことも二度や三度ではなかった。萩原君が腕に神経痛を起してリベルテールを運ぶなくなつて、印刷所のバルカン社から発送するようになるまで、こうした善意にあまえていた。バルカン社から発送するようになってからも、このお母さんはいつもリベルテールのことを心配していて下さったのだった。バルカン社でも諸君の善意で製本費不足の労力奉仕や発送の手伝いなど、リベルテールはこうした蔭の、知られない自発的な協力によって存在し続けている。経済的に苦しくとも、自発的な支持が大切だと思ひので、はじめの頃のようにカンパを呼びかけずに、歯を喰いしばっているのが実状だ。リベルテールの存在には、それなりの価値があるからだ。組織をつくって群盲を煽動して、デモったり、ゲバったりするような表面的なことではなく、

11 ページの「お前たちが・・・から、12 ページの死だ！死だ！」は、フランス文では「この引用文はアルチュール・アルヌルの著『バリ・コミューンの民衆と議会の歴史』からの借用である。わが読者諸君の注意を呼び起こしてもらえたら嬉しいと思う本である」と註がついているのだが、英訳のものには省略してあるのだろうか。

橘君の努力に敬意を表するとともに、こんなに良く訳されたこのパンフレットが、一般に利用されることを祈るものである。

なを叛逆者の言葉の中には、この「バリ・コミューン」のすぐ前に「コミューン」という短文がのっている。コミューンについてのクロボトキンの考え方を知るのに非常に良いものである。（三浦）

発行所

東京都杉並区高円寺南三一九一六

赤城荘 10 号

〒166

A・O・G

底深く燃える生命の火を意識し、その爆発の日を信じるからである。

このお母さんをはじめ、皆の目立たぬ愛情に生かされて来たリベルテールだ。お母さんは七十才だった。生一本を萩原君を育てるのに、どんなに苦勞されたことだろう。その貴い母の愛情で今後よりリベルテールを見守って下さる。リベルテールは生き抜かねば申訳ないのだ。

（三浦）

X

大久保清の事件について訴う

群馬の大島英三郎君が世に訴えたピラである。大島君は親しく大久保を訪い、無政府主義の文書を手渡し、またいろいろと大久保の心事についても語り合っている。この前大島君に会った時も、大久保は心から悔悟していて犠牲者の家に一軒一軒まわって詫びたいと言ったと言っていた。

大島君という無政府主義者が大久保を訪ねたこと、そして大島君が差入れた無政府主義の本に大久保が共鳴したこと、こうしたことがマスコミの手によって歪曲されて嘲笑的に伝えられた。あること、ないこと、芸能人の情事を書き立てたり、ニュースの真実性を判断するだけの知識もなく興味本位に暴露記事に書き上げたり、警察

から一方的に流される記事をそのまま、あるいは潤色して書いたりして、大衆の好奇心や猟奇心をそそっているのが現在のマスコミの姿である。「無政府主義者と殺人犯」という取合わせは好材料だったと言える。

ひとつの事件に関して、その事件の全貌らしいものをいくつかの物的証拠らしいものから構成し、この構成されたものをさらに完全にしようとして「ホシ」をあげ、自分をせまり、その事件に「警察の勝利」をかちとうとする。この構成が間違っていた時こそ悲劇なのだが、「官憲の体面」を守るために「構成の過誤」は認められないことが多い。それだけ民衆の悲劇は積重ねられる。帝銀事件の平沢の証拠と称するものの筆跡を、ただ一人平沢のもので無いと断言した学者は数次の脅迫を受けたという。この証言で構成の環がなくななくなり、平沢を真犯人のごとくマスコミを通じて大衆に信じこませた警察の威信にかかわってくるからだ。

大島君が「真実は不明で疑問だらけです」と言う通り警察の一方的な構成だけがマスコミを通じて発表され、信じられて報道の真実性を問われることはない。このようにして大衆の易信性がマスコミを通じて利用される。民主主義と称する政府の警察と官僚機構と議会制、正直不正直な大衆の盲目的な易信性を利用して体制に奉仕す

るマスコミ、ここに国家の安寧と秩序があるのだ。

大久保は控訴しなかったという。ここに大久保の良心と悔悟の事実は認めねばなるまい。しかし国家に殺す権利があるということ、そして裁判官に死刑宣告の権限があるということは不思議なことだ。しんらんは善人をもて往生す、いわんや悪人おやと言っている。私は若い日、ある判事の未亡人の話を聞いた。「主人は、ある重罪人に死刑を宣告しました。この宣告のためにずいぶん苦しんで調べていました。宣告を受けた犯人が恐ろしい形相でにらみつけました。その眼がちらついてとうとう命を縮めることになりました。」

国家は戦争し、死刑を行なう。命令だと本人は思っても知れないが、人殺しをするのは国民自身ではないか。権力とは責任を負わない体制なのだ。(三浦)

×

バークマンについて

アレクサンダー・バークマンの「共産主義アナキズムとは何か」が、アヴリッチ君の序文をつけて、ニューヨークのドーヴァ出版社から出版された。一九三七年に「共産主義アナキズムのABC」として出されたものの再版である。アメリカでアナキズムへの関心が高まるにつれて、クロボトキンその他の古典が盛に現われる

ようになった。事情はドイツ、フランス、日本でも同様で、古典を読み直す所からこそ、真に新しい出発が行われる。古い殻をなければ新生もあり得ない。

今まで私はバークマンやエマ・ゴールドマンについてほとんど知らなかった。アヴリッチ君の序文から少し抜書きして見よう。この高名なアメリカのアナキストについて少しでも知ることは、私同様バークマンを知らなかった人にとって無駄ではないだろう。

バークマンは一八七〇年十一月、ロシアのヴィルナで裕福なユダヤ人の靴卸商の四人目の子供として生れた。少年の日、ナロードニキの運動は皇帝の暗殺に進展し、彼の学校も爆弾で窓ガラスが飛び地理の授業が中断されたことがあった。その日の夜、彼の寝台の側で兄が言った言葉「人民の意志―圧政者は除かれた―自由ロシア」が深く刻みこまれ、ナロードニキの殉教的態にも感銘した。母の末弟「マクシム叔父さん」はチャイコフスキー団の創立者の一人で、シベリア流刑になったが、その獄中手記にも感動せずにはいらなかった。学校でも反逆的で、十二才のときすでに無神論を書いている。

両親の死後、アメリカに渡ったのが一八八八年であった。シカゴでヘイマーケットの爆弾事件の犯人として四名が不法に処刑されたのは彼の出発の三ヶ月前だった。

ニューヨークにいた時にもこの問題はまどくすぶり続けていて、彼はすぐ「自由の先駆者」というユダヤ人グループに入り、続いてヨハン・モストのフライハイト(自由)というドイツ系グループに加った。終生の伴侶となったエマ・ゴールドマンその他同志たちと一八九二年にマサチューセッツ州ウースターで食堂を開いたが、ペンシルヴァニア州ホームステッドのカーネギー製鋼所で支配人フリックが、ストライキを破るためにピンカートンの私兵を導入して労働者を射撃した。これを知るとバークマンのナロードニキ魂が承知せず、はるばるペンシルヴァニアまでフリックを殺しに行った。フリックは軽傷で助かったがバークマンは十四年の刑となった。刑期を終えて出て来た時は三十五才で、獄中で、青年時代の自由人道主義の理想はアナキキーの明確な生きた真理に結晶していったとエマに書き送っている。同時に彼は反抗と社会解放の手段としてのテロリズムへの信念を捨てて

いる。ヨハン・モストは一九〇六年、彼の出獄の少し前に死に、彼はエマと共に運動の中心人物になって行った。エマはマザー・アース(母なる大地)を創刊しバークマンがそれを編集した。幸徳事件のためにも大いに世論を喚起した(はしもと君の訳したものがバルカン社から出て

いる)。失業者のデモを組織したり、ストライキを支持して活躍し、第一次大戦が起ると反戦運動を組織した。一九一七年にアメリカが参戦するとすぐ捕えられて二年の刑を課された。一九一九年には国外追放となってエマと共にロシアに行った。生れ故郷の土を踏んだ彼はもう五十才だった。ロシアのアナキストたちは大量逮捕され、マフノのゲリラ軍も四散し、労働者の名で君臨する政府はクロンシュタットの叛乱水兵たちにも虐殺をもって報いた。パークマンは「専政が大眾を踏みつぶした。革命は死んだ。革命の精神は荒野で泣いている・・・」。私はロシアを去る決心をした」と言い、故郷の国もない亡命の旅に上るのだった。ストックホルムからベルリンに行き、そこでボルシヴィキ・ロシアやクロンシュタットについてのパンフレットを書き、フランスに行った。幻滅、だが失望する訳には行かない。マラテスタやセバスチャン・フォールやマクス・ネットラウたちと共にロシアで投獄されているアナキスト救援の活動を始めた。そして一九二六年にニューヨークのユダヤ人アナキスト連合のために「アナキズムのABC」を書いた。彼はオリジナルな理論家ではなく、思想的にはクロボトキンを受けたものだがその単純明快な文章によって、クロボトキンの「パンの略取」に並ぶものだと言われる。

一九三六年に二度の手術を受けたが、六月二十三日遂に世を去った。スペイン革命の起る三週間前である。エマは彼がもしも少し生きていたら、この革命の報知でも一度立上れたかも知れないと言っている。アヴリッチが冒頭に引用しているパークマンの言葉を聞こう。

人間再生という途方もない事業は、冷えることのない心の清澄なヴィジョンによって成就される。

一九〇一年、西部監獄にて

アレクサンダー・パークマン

×

ソヴィエットでの反体制新聞

一九六八年以来「時事新報(英語でクロニクル・オブ・カレント・イヴエンツ)」という地下新聞が、ソヴィエットでの反体制意見、逮捕、処罰の記録を出していた。ボロ紙のほとんど読めないようなカーボン・コピーのものであったが、この秘密活動も遂に停止されるに至った。一九七二年一月、アメリカのFBIに当るソヴィエット内務保安委員会(KGB)の指令で追跡粉砕されて第二十七号をもって終りを告げた。狂乱に等しいKGBの活動で数百名が搜索、逮捕、究明、タイプライター、紙、フィルム、手紙の没収を受けたと言われる。

外国人と見たらスパイと思えといった民衆の警戒心が今でも看取できるソヴィエットで、こうした地下活動が行われる事実は見逃せない。何の表示もない巨大な高層ビルのKGBを、知らずに撮影した旅行者が、どこからともなく現われたKGB員に拉致されてフィルムを没収されたという話はよく聞くことだ。独裁者の命令で、このビルの中庭で幾多の政治犯が秘密裡に処刑された。スターリンが権力を握ったのもKGBの前身であるゲベウを握っていたからだと言われる。国家権力をささえるもの、それは警察と軍隊である。

×

ベ平連運動の「総括」

現代の眼の四月号には向井君の「死者が消えたあとに」と大門君の国家幻想と現代ニセ札考」が出ています。向井君は赤旗事件を中心として、親孝行な森岡栄治という清純な一労働者が消えて行った話を描いている。大門君がニセ札考で西郷札に触れているのは面白い。西郷は乃木とともに偉大な人格者と言われて崇拜者も多いが、明治十年に兵を起したときは桐野利秋を造幣局総裁として紙幣を発行させている。国家主義者の革命には結局こうしたことが付きまとう。人格よりも組織と武力だろう。

ベ平連運動については今までおぼろげにしか知らな

ったが、この吉川君の総括でやっと分った。『ベ平連が綱領の規約もたないグループであって、「組織ではなく運動である」と自称してきていることは、今ではかなり知られるようになった。会員制度も持たず、したがって入会手続きも、会費徴集も、役員選挙も、少数の多数への服従もなく、自立した個人の連合による運動体として、それは過去八年間存在して来た』『また地方グループの間にも相互に連絡や協力・提携の関係はあるが、上下関係、指導、命令の組織関係はまったくない』という。こうした運動体として存在を続けるためには当然その運動を展開してゆくために、立つべき原理といったものが無くてはならない。そしてそれが「個人原理」「他者との関係における個人であり、そこで自己を相対化できる人間であり、単に個を自覚した近代的個人一般でもないと言われている。こうした原理から考えられるのが「人間の変革」「変革された個人」として国家原理との対立である。したがって「個人の自主性、自発性を尊重する」。そして日常行動を展開して行く。

こうして書き抜いた所は、われわれのリベルテールの考え方とほとんど共通のものである。われわれは過去にいろいろな誤解や偏見や弾圧にさらされて来て、それ自身の中にもいろいろな偏向や分派をもつアナリズムを

出発点として、個人や社会を考えて来た。ベ平連は、アナルシクではあってもアナルシズムをとらず、マスコミに影響力をもった人たちを中心に運動を展開し、そしてその人たちの政治的見解や思想の相異に關係なく、大きく運動の中に包容しようとしている点で、思想的原理に立とうとするリベルテールとの相異があると思われる。それにしてもこうした運動は、さらにさらに推進して欲しいと思う。(三浦)

X

黒薔薇・創刊業

宇都宮の星君の個人誌である。冒頭に「友よ、私に、
 A生Vの存在、A生Vの重みを感じさせてくれる唯一の可能性を懐かせてくれる友よ。私のA生Vの証しを献げよう。例え、私のA生Vがかげろうのごときはかなきものであろうとも、私は私のA生Vの泉が涸渇するまで、私のA自由Vへの旅を続けよう。——A生Vえの意志をこめて」。そして黒薔薇の館——『時間』の強迫観念に駆られて——の終を「他の人たち、時にマルクス主義者や現代合理主義者等にとっては、私が今まで述べて来たことは、バカげたことに見えるであろう。そして、た
 どうしてそんなバカげたことであまで執拗にこだわるのだろうと不思議に思われるかも知れない。しかし、私

にとって、これはどうにも逃れることのできないものとなつて私自身の中に入りこんでしまっている。——ある種の呪縛性をもって私自身の生き方を左右しているからである。このことはA存在Vの苦しみと、一方においては「私は生きているんだ」という、微力ではあるけれどもA生Vの実感ともいうべきものを私に感じさせてくれるのだ。現代のA存在Vの砂漠、A生Vの枯渇化された空間を彷徨っている私にとって、このことはA生Vの渴望をいやしてくれるアナルヒアへの途のひとつの手がかりともいふべきものを匂わせてくれる。たとえ、それが地獄の底に垂れ下がっている細い微弱なる蜘蛛の糸のごときものであろうと、それが可能性を秘めている限り、私はそれに托すのである」と結んでいる。

A生Vは私にとつても、このようなものだった。そしていたずらに年を重ねて地獄の扉を探しもとめている。

宇都宮市中央郵便局私書箱九七号黒薔薇の館、星金次

(三浦)

人類更生の大道、無政府主義研究書。送料当方もち

八太舟三著	純正無政府主義(農村社会革命講座)	一五〇円	大杉・朴烈ら十二氏著	二〇〇円
無政府主義の誤謬	一三〇円	和田久太郎著	反逆者の半獄手記	二〇〇円
無政府主義の道	七〇〇円	獄窓から	増補版	八〇〇円
マラテスタ著	一〇〇円	古田大次郎著	死刑囚の思い出 増補版	七〇〇円
無政府主義組織論	一五〇円	天皇制破壊への激動	増補版	三〇〇円
選挙戦に際して——付略伝——	二〇〇円	——二皇居発煙筒事件——	訴訟記録——	
農民の中へ	一五〇円	維新労働運動(大正十三年三月号)		四〇〇円
石川三四郎著	マフノの農民運動	大杉栄・伊藤野枝・追悼号		五〇〇円
	弁証法的唯物史観の批評	漫文・漫面		二〇〇円
	進化と革命(ルクリュ著)	権藤成卿著作集第一巻		九〇〇円
	無政府主義とサンジャリズム	自治民権		二五〇円
ベテルロ著	山鹿泰治訳	黒色戦線社編集		二〇〇円
平民の鐘——無政府の福音——	一五〇円	離波大助大逆事件——虎ノ門で現天皇を狙撃——		九〇〇円
岩佐作太郎著	一五〇円	クロボトキン著 麻生義訳		二五〇円
革命断想	近刊	正義と道徳		二〇〇円
石川三四郎ほか三氏著	日本無政府主義運動史 第一編	金子ふみ子獄中手記何が私をこうさせたか 跋・増谷雄高		二〇〇円
近刊	権藤成卿著作集 2 農村自救論、3 君民共治論、4 自治民権、5 日本農制史(発禁)、血盟団、五・一五、二・二六の後にくるもの、パンフ等、6 南洲書、柳子新論、7 八郡通略攻、8 日本震災凶難攻、9 間々子時、10 捕獲			

お知らせ

ギロチン社同志追悼
 古田大次郎墓参
 4月15日(日)午後一時
 青山墓地管理事務所前
 (アナキスト有志)

発行所 黒色戦線社
 〒三七二 群馬県伊勢崎市中和田 大島英三郎方
 振替宇都宮 一一〇一五 大島英三郎